宇宙の庭

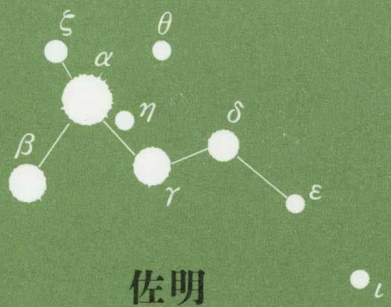
龍安寺石庭の謎

明石散人
佐々木幹雄

宇宙の庭

龍安寺石庭の謎

工业学院图书馆
藏书章



明石散人
佐々木幹雄

講談社

●明石散人
昭和20年、神奈川県藤沢市生まれ。中央大学文学部卒。

●佐々木幹雄
昭和32年、北海道釧路市生まれ。中央大学文学部哲学科卒。ＰＲ代理店勤務。

宇宙の庭——龍安寺石庭の謎
1992年2月25日　第1刷発行

著　者　明石散人・佐々木幹雄
発行者　野間佐和子
発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽二—一二—二一／郵便番号一一二—〇一
電話東京（〇三）五三九五—三五〇五（編集部）
（〇三）五三九五—三六〇二（販売部）
（〇三）五三九五—三六一五（製作部）
印刷所　豊国印刷株式会社
製本所　黒柳製本株式会社
定　価　一四〇〇円（本体一三五九円）

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。送料小社負担にてお取替えいたします。なお、この本についてのお問い合わせは文芸局文芸図書第二出版部あてにお願いいたします。
©Sanjin Akashi & Mikio Sasaki 1992 Printed in Japan

ISBN4-06-205747-6　（文2）

宇宙の庭——龍安寺石庭の謎　目次

第一章　王良と閣道――9
龍安寺へ　11
須臾の世界　27
カシオペアの庭　53
第二章　宇宙の庭――93
龍安寺建立　95
小太郎石と北極星　124
宇宙の庭　142

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

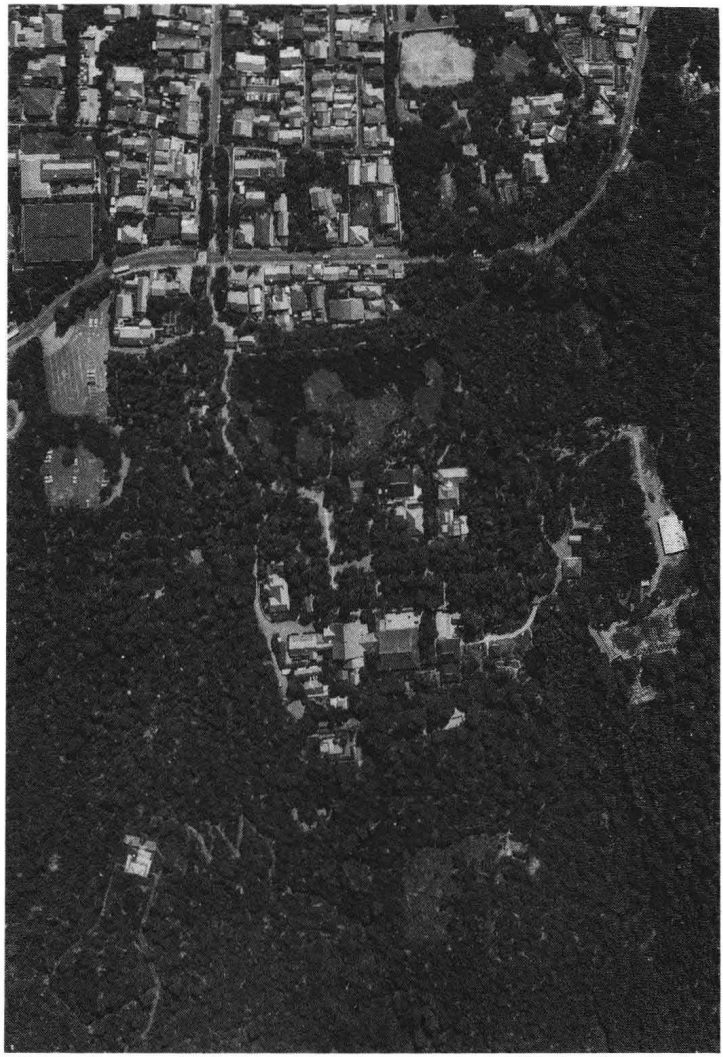
第三章　龍安寺殿の謎――191
勝元と宗全　193
勝元の秘宝　211

装丁／安彦勝博
カバー写真／藤原　弘

宇宙の庭

——龍安寺石庭の謎

題材は何でも良い。誰にでもその存在が知られていて、ある一定の仮説が成されている。この題材に対し、今までの仮説と全く違った方法論と空想力を駆使しながら新しい仮説を構築する。面白い仮説が成されたら、ゲームはそれで終了する。ただし既に発表されている仮説を文献的に使用してゲームを進めてはいけない。



大雲山龍安寺(臨済宗妙心寺派)全景

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

第一章　王良と閣道

龍安寺へ

ダイウンザンニコラレタシタダチニ」アカシサンジン

我が師にして最も尊敬する友人である明石散人氏は一本の電報で、一年ぶりに新しい「ゲーム」の開始を宣言した。

彼のパーソナリティを知る人間は、手紙でも電話でもファックスでもなく、まさに電報であるが故に、そこには多くの情報が盛り込まれていることに気が付く。

では一体、この情報化時代に電報がどのような役割を果たすことが出来るのだろうか。

電報は手紙を遥かに超える速さの情報伝達手段として登場し、手紙そのものを届けず、その内容のみを伝えるという点で、実に画期的な存在であった。電報は文章の長さが料金に直結するため、その内容は要点を集約した簡素なものにならざるを得ず、電話が登場するまでの数十年間、電報は多くの人々の喜びや悲しみ、希望や怒りを、極めて簡潔に集約された言葉で伝えてきた。

ところが明石さんは、その簡潔性を駆使して、プレゼンテーションしてきた。彼はどのようなものに対しても、今までの価値観の延長線的な発想は絶対にしない。凝った内容の電文を考えようと、電文を記した紙に押し花がつこうと、オルゴールが仕掛けられようと、それらは皆従来の価値観と同一線上の一点における発想でしかない。明石流の発想では電文に「韻文」の輝きを見るのである。手紙や電話が長く散文的であるのに対し、電報文は極めて研ぎ澄まされた韻文として存在する。言葉を最もシェイプアップした媒体である電報の中に、明石さんは情報伝達の新たな可能性を見つけたのだ。

深夜、机の上に明石さんから来た電報を置いて、その意味を考えた。

最初の「ダイウンザン」がどうも判らない。百科事典にも、国語辞典にも、地図帳の索引にも、さらに『地名辞典』まで見たのに出ていない。

その時突然、電話が鳴りだした。深夜の電話は、実際以上に大きく鳴り響くように感じられる。すでに日付は変更している時間だった。

受話器をはずした途端、

「よォ、佐々木起きてたか」

と、しわがれた大きな声が聞こえてきた。

元上司で、今は関連会社の社長をしている小松太郎氏だった。

「……はい……」

「お前が今何してたかを当てて見せようか」

「……ええ」

「明石散人氏からの電報にあった『ダイウンザン』の意味がどうしても判らない。どうだ図星だろ」
「……どうして、そんなことが判るんですか」
「はっはっは、俺には何でも見通しだ……と言いたいところだが、実は俺のところにも電報が来た。多分お前も呼ばれている筈だと思ってな」
　私だけでなく、小松氏にも打電していたのだ。我々を「ダイウンザン」に集めて、明石さんは何をしようというのだろう。
「ところで佐々木、ダイウンザンの意味を教えてやろうか」
　後々、佐々木はダイウンザンも知らなかったと言われそうだが、判らない以上、素直に元上司の教えを乞うしかないだろう。
「是非お願いします、小松社長」
「ダイウンザンは、大きな雲の山だ。とは言っても山の名前ではなくて、寺についた山号だ。大雲山と言うのはな、龍安寺のことだ」
「龍安寺……、あの石庭で有名な」
「そうだ……、龍安寺のこと少し勉強しといた方がいいぞ。でもまぁ、いまさら遅いかな。室町時代のことにかけては、俺はちょっとうるさいからな。明日は、あの明石先生も俺の知識量に驚くから楽しみにしてろよ。少し調べ物をしなきゃならないから、じゃあな」
　小松氏は言うだけ言うと、さっさと電話を切ってしまった。今までの小松氏から聞いたことのないほどの弾んだ声だ。明石さんはよく「ゲーム」という言葉で、様々なテーマで知的考証を試みる。小

松氏は二度ほどゲームの提案者になっているが、いつも新発見の史料を駆使し全く新しい観点から新説を打ち立てる明石さんのコールド勝ちだった。自分の得意分野で明石さんがゲームの開始を宣言したものだから、絶対にこのリターンマッチをものにしたいと小松氏は意気込んでいるのだろう。龍安寺は集合場所でもあり、解明すべき「謎」の対象でもある。とすると、その謎というのは、必然的に「石庭」という結論が導きだされる。

たった十六文字にこれだけの意味合いを持たせるのだから、明石散人は優れた歌人である。

古来、歌を受けた者は、返歌をしなければならない。この返歌ならば、韻文の才のない私でもできる。明朝一番の新幹線に乗って、いざ鎌倉、ならぬ、いざ京都へ、と向かえばよいのだ。

午前六時発のひかり号は、定刻通りの八時三十六分、京都駅に着いた。

始発の新幹線は出張に出かけるサラリーマンで一杯。席に着けない人もかなりいた。これから真剣勝負の仕事を控えているビジネス戦士にとって、朝から立ちっ放しとはさぞかし大変なことだろう。

明石さんから同じ電文で呼び出された小松太郎氏も、このひかり号に乗っている可能性もあるのだが、とても確認できる状況ではなかった。幸い席を確保できた私は、昨夜の睡眠不足を少しでも解消しようとしたのだが、明石さんが龍安寺でどんな発表をしてくれるかを考えると、京都に近づくに従って興奮の度合いが増し、とても寝てなどいられなくなってしまった。

車内放送が十分後に京都に着くことを告げると、すぐに身支度をし、デッキに出て待った。

ひかり号のドアが開くと、すぐにタクシー乗り場に駆け降りた。去年出張で来たことがあったの

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com